

## 活動スタイルの多様化を目指した日本語ボランティア養成講座

俵 山 雄 司・大 和 啓 子・渡 部 真由美

〔実践報告〕

## 活動スタイルの多様化を目指した日本語ボランティア養成講座

俵 山 雄 司・大 和 啓 子・渡 部 真由美

### 要 旨

新規ボランティア参入者のための日本語ボランティア養成講座を実施した。対話型へと向かう地域日本語教育の流れと、受講者が活動予定の日本語教室の実態を踏まえ、教室での進め方のスタイルを複数示すことを目指した。講座では、(1) 外国人にとってわかりやすいコミュニケーションのコツ、(2) 文型の意味を伝える方法、(3) 品詞や活用など市販の日本語教材を読み解くための基礎知識、(4) 文型や会話の練習方法、ゲームやタスクなどの活動、(5) 対話型の活動のための教材等を扱った。受講者のアンケートからは、対話型活動へも意識が向けられたことがうかがえたが、一方で、ボランティア参加に難しさを感じたという感想もあり、自信を持って活動に臨めるような講座の進め方については、改善の余地があると言える。

【キーワード】 新規ボランティア参入者 日本語ボランティア養成講座 対話型 教授型  
地域日本語教育

### 1. はじめに

1990年代以降、全国各地で、地域に在住する外国人を対象として、日本語の習得を支援する活動が行われてきた。この活動は、主に地域住民によるボランティアによって行われており、日本語を学びたい、あるいは日本人や他の外国人と交流したいという外国人住民の受け皿となっている。また、これに付随して、地方自治体やNPOなどが、新規のボランティア参入者に対して、「日本語ボランティア養成講座」を開催し、活動を行う前提となる知識や態度を身に付けてもらうこともよく見受けられる。2007（平成19）年度からは、各地の日本語教室で企画された意欲的な取り組みに対して事業費を交付する、文化庁の委託事業「生活者としての日本語教育事業」も行われており、この事業の支援を受けて各地で様々な内容の日本語ボランティア養成講座も開催されている<sup>1)</sup>。

一方で、上記事業の委嘱で日本語教育学会が行った調査研究の報告の中で、各地の養成講座において、従来の「教える－教えられる」といった一方向の「日本語教授型」以外に、双方向の学びに目を向けた「新しい人材育成の動き」が確かに存在し<sup>2)</sup>、広がりを見せていることが報告されている（日本

語教育学会編 2008)<sup>3)</sup>。ただ、双方向の対話型活動を志向したボランティア養成講座を受講していても、継続的なフォローがなされないと、次第に「教える－教えられる」活動へと移行することが多いとの指摘もある(米勢 2011)。また、対話型を志向した講座を受講した新規ボランティア参加者と、従来型の「教える－教えられる」活動を行っている先輩ボランティアが、一つの日本語教室の中で共存を迫られる事態への対応など、考えるべき事柄は少なくない。

本稿では、群馬県のX市で行った新規ボランティア参加者向けの「日本語ボランティア養成講座」の実践を報告する。この実践は、修了後に参加予定の日本語教室の活動形態を踏まえ、対話型活動と教授型活動という複数の活動スタイル提示を試みたものである。

## 2. 今回の講座の背景

筆者たちのグループが、「日本語ボランティア養成講座」の講師を担当することとなったのはX市国際交流協会の事務局からの依頼に基づいてであった。講座は、2012年7月23日(月)から8月27日(月)まで週1回2時間、全5回で行われた。

この講座は、修了者に対し、協会主催の日本語教室へのボランティアとしての参加を期待して開催された。このことは、申し込みの要領にも記載され、講座の初回と最終回でも、協会職員から説明と勧誘があった。筆者たちは、修了者が、協会主催の日本語教室に加わる際に、スムーズに入っていくように、今回の講座の内容をデザインし、実施するということで意見が一致した。そのために、筆者たち3名は、2名ペアと1名でそれぞれ1回ずつ、事前に日本語教室に見学に出向き、活動の様子を観察し、協会職員でもあるコーディネーターの話を聞いた。

以下にその概要を記す。

- ボランティアは全員が日本語母語話者で5～6名が活動している。ボランティア1～2名に対し1～6名の外国人でグループが構成されている。
- 従来は、ボランティア1名に対し外国人多数の形態を採用していたが、近隣の市町村のボランティア教室の形態がボランティア1名対外国人少数の形態へと移行したのにならってグループ形式やマンツーマン形式を導入した。
- ボランティアと外国人との組み合わせは、学期(1学期は約3ヶ月間、1年は3学期から構成)の間、基本的には固定となる。様子を見て学期途中でコーディネーターが組み換えを行うこともある。一方で、学期途中から参加する外国人もあり、これに対しては、既存のグループのいずれかに入ってもらおう。
- コーディネーターは市の職員であり、日本語教育のプロパーではない。しかし、他の市町村の日本語教室を見学し、運営方法の改善を図ったり、簡単なアンケートでニーズ調査を行い、外国人とボランティアのマッチングをしたりと、教室の企画や運営に積極的に関与している。
- 決められたテキストは特にないが、『みんなの日本語初級I本冊』(スリーエーネットワーク)の

形式の一部をモデルとして、地域の地名などを盛り込んだ簡易冊子のテキストが用意されている。また、動詞活用表や漢字リスト(産出が必要なものと理解だけでよいもの)、群馬の方言などの学習を補助する内容と、地域のイベントや防災の情報(対訳付き)などの生活を補助する内容を含んだ冊子も作成されている。

- それぞれのグループの活動は、文型積み上げ型の授業形式で行われるもの、話題シラバスをもとにおしゃべり形式で進めていくもの、漢字や敬語のみを扱っているものなど、様々なものがある。どのような活動をするかについて制約はなく、ボランティアの裁量に任されている。

筆者たちは、このような状況を踏まえて、会議を持ち、講座内容を検討、企画した。その際に、先行研究で提示された「地域日本語教育」を理解／解釈する視点を参考にした。第3節で、それについて紹介した後、第4節で具体的な講座の内容について述べる。

### 3. 地域日本語教育を理解／解釈する視点

「地域日本語教育」を理解／解釈する視点として、先行研究から2つの概念を紹介する。1つ目は尾崎(2004)の「学校型日本語教育」「地域型日本語教育」、2つ目は山田(2003)の「社会の変革を目指した相互学習」「社会への参加を目指した言語習得」である<sup>4)</sup>。

#### 3.1 尾崎の「学校型日本語教育」「地域型日本語教育」

尾崎は、日本語教育の形態を大きく「学校型」と「地域型」とに分類している。

「学校型」は、大学や学校などの教育機関で行われている形態である。教師一人が複数の学習者を担当するのが一般的で、プレイメントテストでのレベル判定により、教室内の学習者の日本語レベルは一定の範囲に収まるようにされる。資格要件により選抜された教師が、ビザ、授業料支払などの要件を満たした学習者たちを教えるのが普通である。

一方、「地域型」は、ボランティア中心に地域社会で行われている形態である。クラス形式・グループ形式・マンツーマン形式など様々な形式がある。プレイメントテストが行われることもあるが、必ずしも細かくレベル分けされているわけではない。教授者には特に資格要件はなく、学習者への受講制限もないか、あってもわずかな受講料程度である。

#### 3.2 山田の「社会の変革を目指した相互学習」「社会への参加を目指した言語習得」

山田は地域における日本語教育(日本語学習・支援活動)には、2つの形態・機能のものが必要だと主張する。1つは「社会教育」としての「社会の変革を目指した相互学習」である。これは、外国人と日本人が対話しながら、地域の問題から地球の問題にいたるまで、その解決方法を考え、行動するために、「相手とともに」学ぶものである。媒介言語は何語でもよいが、日本語を媒介言語とする場合は、外国人にも日本人にも、「媒介語としての日本語」を運用できる能力の習得が求められる。この

日本語は、意志疎通を図ろうと努力する過程で自然に構築される性質を持つものである。

もう1つは、「補償教育」としての「社会への参加を目指した言語習得」である。これは、日本社会が多言語対応していない現状を考慮し、外国人が日本社会において自己実現するのに必要な日本語能力を習得する機会を保障するものである。こちらは、行政などが責任を持って、一定の質と量を備えた教育を提供することが求められる。

山田は、上記の2つはそれぞれ異なる場を設定して行われるべきだと主張する。ただし、現実的には、行政側の対応の不十分な点をカバーするために、前者に参加を希望する日本人が、外国人の求めに応じて日本語を教えている現状は、容認する立場に立っている。

### 3.3 日本語教室の解釈

以上、2つの先行研究を見てきた。ここで示されている分類を用いて、筆者たちが観察した日本語教室の状況を解釈すると以下ようになる。

- ・教授者に対する要件は、都合で休む際は前もって連絡すること程度である。学習者に対する要件は、特にない。また、プレイスメントテストや謝金を払って採用されている講師もおらず、尾崎のいう「地域型日本語教育」に該当する。
- ・日本語教室にやってくる外国人たちは、大部分が、日本語を学ぶことを主目的としている（ように見える）。また、ボランティア活動者がそれに応じているため、「社会への参加を目指した言語習得」の色合いが強い。ただし、各グループでの進め方は基本的にボランティア活動者に任されており、自由度は高い。

上記を受けて、筆者たちは、以下のような方針で講座をデザインすることにした。

「地域日本語教育」の枠組みの中で、外国人そして日本人双方のニーズや興味に応じて「社会の変革を目指した相互学習」「社会への参加を目指した言語習得」のいずれか（あるいは両方）に携わるための準備期間やリソースを提供する。

講座は2時間を5回という限られた時間で行わなければならない。その中で、2種類の活動に関与できる技術や態度を身に付けようというのは、物理的にもかなり無理があるのではないかと考えた。しかし、誰でも参入可能なボランティア活動という点を考えると、対話による相互学習の方法や考え方を扱う意義は大きいと考えた。一方で、実際にボランティアとして教室に参加した際に、先輩ボランティアに対して、「自分が講座で見聞きしたことと全く異質のことをやっている」と感じ、両者の間に溝ができてしまったり、貴重なリソースとなる先輩ボランティアに助言を求めることが難しくなってしまうということも懸念された。このような事情が、上記の方針に反映されているわけである。

#### 4. ボランティア養成講座の実際

ここでは、まず前節で述べた方針に従って作成したボランティア養成講座のシラバスを示す。そして、各回に分けて、具体的な活動や、実際に実施してみたの反応・感想について報告する。

3.3節で掲げた方針に従って、「社会の変革を目指した相互学習」を視野に入れた日本語教室の活動スタイルを対話型、「社会への参加を目指した言語習得」を支援する活動スタイルを教授型と捉え、この両方のスタイルを5回の講義でバランスよく提示することを試みた。第1回と第5回では、対話型に適した内容を扱い、第2回～4回では、教授型を主に行っているX市の日本語教室の実際に則した内容を扱うことにした。各回のシラバスおよび意識する活動スタイルとのかかわりを、表1に示す。無論、対話型と教授型は重なる部分もあり、各回ともその両者を念頭に置いていたが、どちらの側面をより意識して講座を進めたかを目安として示している。

表1 X市国際交流協会主催 日本語ボランティア養成講座シラバス

回	開講日	取り扱う内容	意識する活動スタイル
第1回	7/23	地域で暮らす外国人 地域で暮らす外国人の多様さに目を向けイメージを膨らませる わかりやすいコミュニケーションの方法 外国人にとってわかりやすいコミュニケーションのコツと練習	対話型中心
第2回	7/30	日本語の教え方(1) ことばの使い方を示す 文型の意味を伝える方法	教授型中心
第3回	8/6	日本語の教え方(2) 日本語について理解する 品詞や活用など市販の日本語教材を読み解くための基礎知識	教授型中心
第4回	8/20	日本語の教え方(3) コミュニケーションの中で学ぶ 文型や会話の練習方法、ゲームやタスクなどの活動体験	教授型中心
第5回	8/27	日本語ボランティア活動のスタイル 対話型の活動のためのテキストの紹介と体験 地域の日本語教室の役割 楽しくボランティアをするためのアドバイス・注意事項	対話型中心

なお、講座の募集は、講座開始3週間前頃から国際交流協会のwebページと市の広報誌(月1回各家庭に配布)にて行い、合計16名の申込みがあった。うち14名は、日本語ボランティア経験がなかったが、2名は、協会主催の日本語教室に既に参加していた。

参加者の反応を探るため、初回を除き、簡単なアンケートを用意し、講座の最後の10分程度を使って記入してもらった。ただし、都合で早退してアンケートに記入できなかったり、特に書くことがないという理由で提出しなかったりする参加者も毎回何名かいた。

以下では、各回の具体的な講座内容について報告する。

## 第1回

まず、アイスブレイキングとして、配布した1枚の紙を4つのスペースに分け、名前・趣味・X市で好きなところ・この講座に期待することを書いてもらった後、立ち上がってそれぞれ他の参加者3名と順に書いた内容について紹介し合うという活動を行った<sup>9)</sup>。

雰囲気はほぐれたところで、「今までの人生で出会った外国人」について国籍・年齢・仕事・母語・日本語のレベルを思い出し、ペアでお互いに紹介し合った後、数名に全体に向けて話してもらった。これは、地域で暮らす外国人の多様な背景を知り、今後の講座やボランティア活動についてのイメージを膨らませるためのものである。

次に、外国人とやり取りする際に役立つ、わかりやすいコミュニケーションの方法についてクイズ形式で紹介した。具体的には、「漢語より和語を使う」「複合語は言い換えて話す」「文の構造をシンプルにする」「辛抱強く聞く」「相手の言ったことを繰り返したり、あいづちをうったりする」の5つである。これについてもペアでの意見交換をした後、全体で解答を確認した。そして最後に練習として、ペアの一方が「今日起きてからここに来るまで」をわかりやすく話し、もう一方が相手のことばを繰り返したり、大きくあいづちをうったりする活動をして締めくくった。

## 第2回

日本語文法の考え方と外国人への伝え方について紹介した。前半では、母語話者が通常日本語を使用する際には意識することのない日本語文法について考える作業を行い、後半では前半で考えたことを、外国人に説明する方法について紹介、実践した。

具体的には、「～たい」という形式を例として取り上げ、それを普段使用する場面の想起や「暑いので髪を切りたいです。」など学習者の誤用例の検証などから、願望や欲求などの意味を持つこと、また動詞・マス形に接続することなどを意識化する作業を行った。

また、外国人の日本語のミスを指摘するタイミングや方法についても言及した。

以上のような日本語文法についての意識化の作業を経たうえで、次に、それを外国人に伝える方法を紹介した。ここでは、まず、未知の外国語学習体験を通し、意味がわからないまま、ことばをリピートさせられることのストレスや、言えることと理解することの違い、絵やジェスチャーなどが理解の助けとなることを体感してもらった。

続いて、「～は～より…」という文型を例として、まず、前半で勉強した文法の意識化を行い、比較の文型であることを確認した後、それを外国人に伝える方法を紹介した。北京出身の外国人に対し、「北京はA市より暑いですね。」の例を提示するなど個々にとって身近な、具体的な状況に即した文中で文を使用することによって、文型の意味を「説明」するのではなく、「推測」してもらおうことができるようにすることを示した。

最後に、まとめとして、「～たい」の使い方を外国人に伝える方法をグループで考え発表してもらった。

## 第3回

日本語文法の知識、具体的には品詞と動詞の活用について紹介した。前半では、日本語文法の品詞について思い出しながら国文法との違いを確認し、母語話者が意識することのない日本語文法について考えた。後半は、動詞の活用とグループ分けを紹介したうえで、初級テキストにある動詞を用いた文型例を紹介した。

まず、英語と日本語で品詞が異なる「ほしい」「ちがう」を例として取り上げ、動詞と形容詞の区別の仕方を考えた。次に、「きれい水」という誤用を例にイ形容詞とナ形容詞の区別の仕方を、「病気になる」という誤用を例に名詞と形容詞の区別の仕方を考えた。

後半では、動詞のマス形と辞書形について、まずマス形を先に教える理由を考え、辞書形を学ぶメリットを伝えた。その後、動詞のマス形－辞書形－ナイ形の例を挙げ、3グループに分類し、動詞のテ形をグループに分ける作業を行った。そして、以下のように、実際の文例を見ながら動詞の形を確認した。

例：マス形(1)	Q：マリアさん、一緒に映画に	行きませんか。	
	A：はい、	行きましょう。	
( )形(5)	これは私が明日	着る服	です。
( )形(8)	窓を	開けてもいいですか。	
( )形(10)	薬を	飲まなければなりません。	

最後に、まとめとして、外国人の日本語の誤りが品詞や活用のルールのもつ誤りによっておこることもあると知っておくと、相手が何と言いたかったのかを推測することができることを示した。

## 第4回

1回～3回の講座で扱った「外国人にとってわかりやすいコミュニケーションのコツとその練習(第1回)」、「文型の意味を伝える方法(第2回)」、「品詞や活用など市販の日本語教材を読み解くための基礎知識(第3回)」を日本語ボランティア教室でどのように役立てるか示しながら、日本語ボランティア教室での代表的な流れを紹介した(図1)。

まず、X市の日本語教室で想定される4つの流れのパターンを図に表し、進め方は一様ではなく、相手のニーズや希望、日本語力によって、流れが変わることを示した。そして、はじめに質問応答(Q&A)をすることで、相手の日本語力の程度を把握することができることを伝えた。

次に、『みんなの日本語』の練習Bを紹介しながら、質問応答を軸に活動を進める練習を行った。練習の目的は、テキストを用いた練習の後で、何も見ないで自分のことを話したり、質問応答したりできるようにすることである。そのための注意点として、「形を作る練習(ドリル)」で終わるのではなく、相手の情報を引き出す質問をできるだけ多くするよう強調した。



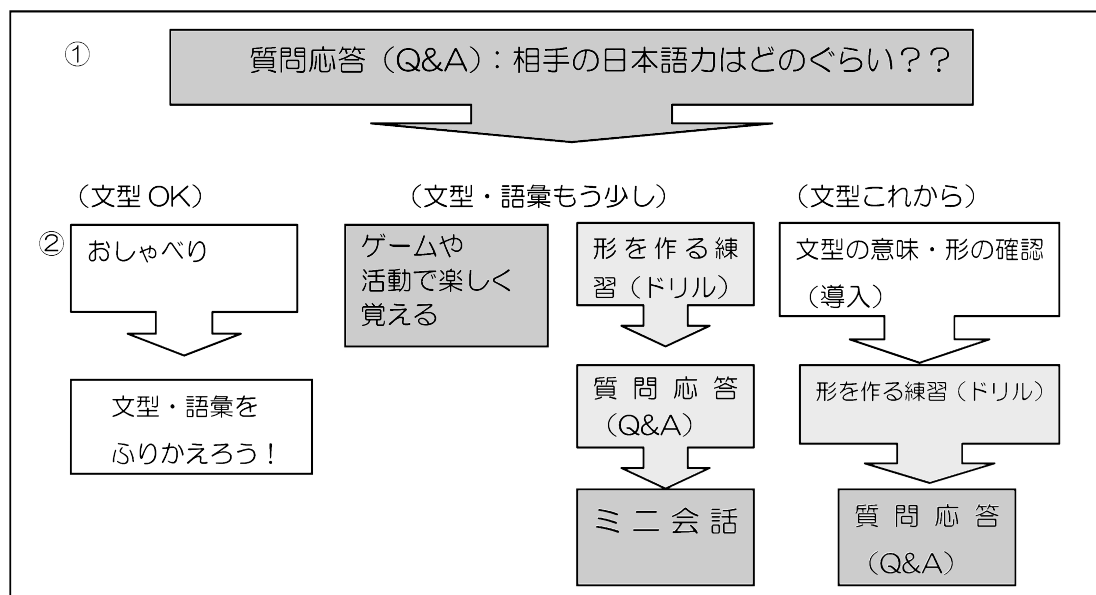


図1

次に、相手が該当文型を使えるか知るためには、文型を使った質問の方法があることを紹介し、「～を～ます」を用いた質問文を作る練習を行った。

続いて、会話ができるようになるための練習の1つとして、会話を覚える方法を紹介した。まず、テキストの本文を2分間で覚えることで、まとまった長さの会話を丸暗記することの大変さを体感した。それを踏まえて、本文より分量が短く、暗記しての会話練習が可能な『みんなの日本語』の練習Cを紹介し、その会話のひな形を用いて実生活に即した穴埋め会話文を作る練習を行った。

講座の後半では、学習した文型を用いた活動やゲームを3つ体験した。部屋を描いた絵を見ながら「～てもいいですか」(例：このいすに座ってもいいですか)を用いた質問文を作る活動、「～たり、～たり」を使った口頭でのしりとり、地図を見ながら行う道案内である。道案内は、外国人の気持ちを体験するために、英語を用いて行った。

## 第5回

まず前半で、文型に焦点をあてない日本語ボランティア活動のスタイル(対話型)について紹介・体験した。具体的には、ペアを作り、外国人役とボランティア役とに分かれ、『にほんご宝船 いっしょに作る活動集』(アスク)、『日本語おしゃべりのたね 第2版』(スリーエーネットワーク)を使って、表現を確認したり、お互いのことについて質問し合ったりする活動を行った。その際には、1回目で紹介したわかりやすいコミュニケーションの方法を使う、均等に話せるように注意する、ボランティア側がまず自分のことについて語ることを意識してもらうようにした。

そして、活動を終えた後で、ペアで、2つの教材のどちらが自分の好みに合うか、また、それはど

うしてかについて意見交換し、何名かには全体に発表してもらった。これは、教材の選択について言語化することで、教材を見る視点や個人の嗜好の多様性に気付かせる目的で行った。その上で、教材には話題シラバスに基づくものと文型シラバスに基づくものがあること、それぞれがどんな外国人に向いているかなどを解説した。その他、教材は、部分的に使ったり、自作したり、実物や写真を持ち込むなどして、自由に使用・デザインしてよいことを強調した。

後半は、地域の日本語教室の役割と題して、日本語ボランティア活動を楽しもうためのアドバイスをを行った。例えば、答えられない質問があるのは当然でみんなで一緒に考える、外国人とボランティアの両方が来たくするような雰囲気作りをする、まず自分のことを積極的に話したうえで、相手の言いたいことを引き出す、相手の話す量を増やすような工夫をすること、などである。また、お互いに気持ち良くコミュニケーションをするための注意点として、①子どもに話すような口調で話さない、②日本の経済力を鼻にかけたような言動は慎む、③国籍で相手を区別しない、④自分のことばかり話さない、⑤発音をしつこく直さない、⑥政治的な問題を取り上げないという6点を示した。

## 5. 成果と課題

5回の講座を終えての成果と課題について記しておく。成果としては、まず、回数が少ないことも奏功して、受講者の多くが最後まで意欲的に参加してくれたことが挙げられる。このような講座は回を追うごとに参加者が少なくなっていくことがあるが、10人を割り込む回はなかった。また、対話型と教授型という2種類のボランティアの方法(スタイル)があることが提示できたということもある。受講者のアンケートでは、教授型の具体的な活動方法が学べたということのほか、日本語教室に集う外国人が様々な目的を持っていることに意識が向けられたり、話題シラバス教材への言及が多くみられるなど、対話型活動へと視点が広げられたことがうかがえた。これは、教授型と対話型の両者が併存しうる環境であるX市の日本語教室においては、ボランティア側の参加の選択肢を増やし、またこれまで教授型活動を主に行ってきた先輩ボランティアというリソースへと繋がるための接点を多くするという点で、今後役に立つものになったのではないかと考える。ただし、この成果の2点目については、活動を始めたボランティアへのインタビュー調査を行わなければ、実際の成果のほどはわからないと言える。

課題としては、講座の途中で外国人に来てもらい、実際に外国人住民とのコミュニケーションを取る場所を設けられなかったということがある<sup>6)</sup>。これは当初の案では4回目もしくは5回目に外国人に参加してもらう予定だったのだが、都合がつかず、断念したという経緯がある。また、文型や文法を中心に扱った2・3回目に関しては、「難しい」という感想が多く、これにより参加者のボランティア活動への心理的ハードルが上がってしまった可能性がある。文法や文型を取り扱うにしても、もっと参加者の自己効力感を引き出すような活動を設定する必要があると感じた。

本稿では、講座修了後に参加予定の日本語教室に戸惑いなく入っていけるように、そして、今後自

立したボランティアとして、様々なスタイルでの活動を展開していけるように内容をデザインしたボランティア養成講座の実践について、報告した。今後は先にも述べたように、講座を修了してボランティアとして活動をはじめた方にインタビューなどを行い、当初抱いていた希望とのずれや悩み、講座の何がどう役立っているかを調査することで、より円滑にボランティア活動の開始・継続ができる内容を検討していきたい。

#### 注

- 1) 各講座の概略は、この事業の web ページで閲覧することができる。
- 2) 深澤・中河・松岡 (2006) では、意欲的な試みをしている 2つの地域の養成講座のシラバスが紹介されている。
- 3) 該当部分の執筆者は中河和子氏である。
- 4) 「地域日本語教育」を理解／解釈する視点としては、この他にも、米勢 (2006) による、活動の目的・場所・日時・内容・方法・形態といった特徴に基づいた重層的な類型化があるが、議論を単純にするため、ここでは触れない。
- 5) 『人と人をつなぐ日本語アクティビティ50』(アスク) 中の「私の4つの顔」を参考にした。
- 6) 日本語教育学会編 (2008) は、実際にいくつかの話題や活動の例を提示し、受講者同士あるいは外国人住民と共に体験してみることを推奨している (該当部分は新矢麻紀子氏執筆)。

#### 参考文献

- 足立裕子・松岡洋子 (2005) 「地域日本語活動における提案—地域日本語活動に求められるもの—」『新潟大学国際センター紀要』1, pp.13-22
- 池上摩希子 (2007) 「『地域日本語教育』という課題—理念から内容と方法へ向けて—」『早稲田大学日本語教育研究センター紀要』20, pp.105-117
- 伊藤健人 (2009) 「地域日本語教育—取り組むべき課題は何か—」『日本語学』29-11, 明治書院, pp.12-23
- 尾崎明人 (2004) 「地域日本語教育の方法論試案」小山 悟・野原美和子・大友可能子編『言語と教育—日本語を対象として』くろしお出版, pp.295-310
- 日本語教育学会編 (2008) 『平成19年度文化庁日本語教育研究委嘱 外国人に対する実践的な日本語教育の研究開発 (『生活者としての外国人』に対する日本語教育事業) 報告書』日本語教育学会
- 深澤のぞみ・中河和子・松岡裕見子 (2006) 「地域在住外国人に対する日本語ボランティアの養成シラバス」『富山大学留学生センター紀要』5, pp.1-15
- 松岡洋子 (2006) 「実践型日本語学習支援者養成の試み—岩手における実践分析と提言—」『岩手大学生涯学習論集』2, pp.15-22
- 山田 泉 (2003) 「地域社会と日本語教育」細川英雄編『ことばと文化を結ぶ日本語教育』凡人社, pp.118-135
- 米勢治子 (2006) 「『地域日本語教室』の現状と相互学習の可能性—愛知県の活動を通して見えてきたこと—」『名古屋市立大学大学院人間文化研究科 人間文化研究』6, pp.105-119
- 米勢治子 (2011) 「地域日本語教育における人材育成」『日本語教育』144, pp.61-72

## Japanese volunteer training seminar for diversifying practice style

TAWARAYAMA Yuji, YAMATO Akiko, WATANABE Mayumi

We conducted a Japanese volunteer training seminar for new volunteer participants. This seminar aimed at displaying two or more styles of volunteer activity based on the present stream of regional Japanese education, which is inclined toward interactive dialogue style, and on the actual situation of a Japanese language class, which the students of the seminar, as volunteers, are expected to enroll in. In the seminar, we promoted learning through lectures and experiences regarding 1) good methods for comprehensible communication for foreigners; 2) a technique for showing meanings of sentence patterns; 3) basic knowledge for reading Japanese teaching materials, such as parts of speech and conjugation; 4) a technique for practicing sentence patterns and conversation and activity experiment involving games and tasks; and 5) teaching material for interactive dialogue style. The students' questionnaire results indicate that they became aware of the interactive dialogue style activity, but experienced difficulty during the volunteer activities. Therefore, there is scope for improving the seminar, especially in its efforts for increasing students' confidence in succeeding in volunteer work.